

第6回 国際ワルラス学会 (the International Walras Association) が、9月11日から13日まで、京大会館で開催されました。この学会開催に当たっては、経済学史学会からの協賛を得て、これまで SHET などを通じて、会員の皆様に情報をお伝えしてきました。学史学会からの参加者も得て、たいへん有意義な3日間であったことを、ご報告いたします。

今回の学会のテーマは、「ワルラス経済学の国際的普及—影響、解釈、論争 The International Diffusion of Walras's Economics: Influence, Interpretations and Controversies」でした。これまで、ヨーロッパのみで開催されていた本学会が、はじめて日本で開かれるにあたって、ふさわしいテーマはなにかということ、この学会の責任者に任命された2年前にずいぶん考え、関係者たちと議論し、このテーマを選びました。

セッションは6つ、報告論文は20本でした。ヨーロッパからの参加者が大多数であるため、当初は参加のキャンセルを危惧しましたが、幸いにも最小限に抑えられました。今回の学会の報告には、実は予想以上の応募があり、プログラム委員会は、厳しい審査で論文を選抜せざるを得ませんでした。論文の水準はいずれも高く、テーマに合致した内容の論文が大部分を占め、興味深い議論を重ねて行くことができました。

本学会の実行委員を引き受けてくださった、京大の八木紀一郎会員による開会公演「ワルラスとオーストリア学派」に続いて、本学会のテーマに直接関連するセッション、「ドイツ、日本、アメリカにおけるワルラス経済学の普及」、「イタリア、スペイン、オランダ、ロシアにおけるワルラス経済学の普及」、「フランス」、「20世紀の経済学者によるワルラス経済学の普及」が、第1日目と第2日目に開催されました。この中では印象的だったのは、ワルラス経済学の普及過程を軸として、異なった国々の間での直接的、間接的な影響、それぞれの解釈の共通点および相違が、理論的な観点のみならず、思想的にも、歴史的にも、実に多様な視点から明らかになり、そのような研究がもちうる意義と可能性が示唆されたことです。これこそが、経済学史の学会の醍醐味だと感じました。

2日目の最後は、リヨン第2大学教授で、『ワルラス全集』の編集者のひとりでもある Pierre Dockès 氏によるセミナーが行われました。氏が、昨年度のフランス上院の経済図書賞を受賞した、グローバリゼーションをテーマとする著書 *L'enfer, ce n'est pas les autres! : Bref essai sur la mondialisation* についてのセミナーです。このセミナーは、フランス語で行われましたが、予想以上の参加者で、活発な議論が行われました。またこの日の夜に行われた、美しい日本庭園で有名な山縣有朋の旧邸宅「がんこ二条苑」でのディナーも大変好評でした。

3日目は、「哲学と社会主義」、「純粋経済学と貨幣」というワルラス研究の古典的なテーマを扱うセッションが開かれました。この二つのセッションにおける報告論文にも、やはり本学会のテーマと深く関連しているものが多くありました。各参加者の研究の手法や分野は異なるものの、本学会のテーマを軸として、同じ土俵で議論をすることができたのは、とても刺激的でした。

次回の国際ワルラス学会は、2010年にローザンヌあるいはリヨンで開かれる予定です。2010年は、ワルラス没後100年にあたり、盛大な会が催されることでしょう。学史学会の会員の皆様の参加をお待ちしています。

(御崎加代子 記)

